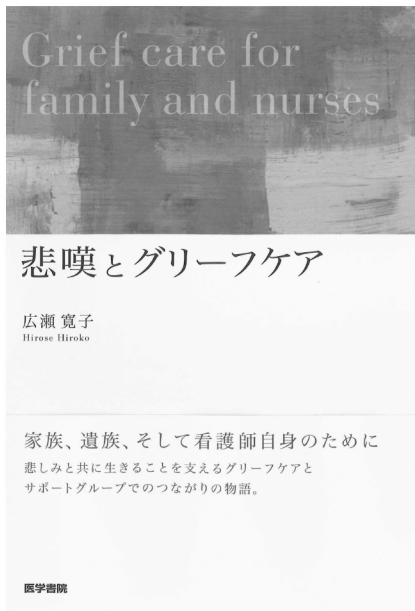




悲嘆とグリーフケア

広瀬寛子 著

定価2520円(本体2400円+税5%)
医学書院 ☎03-3817-5657

大切な方をうしなうつらさを理解できますか？そして、その方々を支える難しさ、とても大きくて悩むことがあります。私もこれまで関わらせていただいた患者さんのご家族や恋人など、仲がいいほどそのつらさは大きいように感じられて、どう支えていったらいいのだろうかといつも悩んでいました。

今回、広瀬寛子さんが、大切な方を失うつらさや、その支援の仕方について丁寧に書かれている『悲嘆とグリーフケア』を読ませていただきました。中にはドキドキするようなリアルな表現で、(実際に体験されたことのようにですが)ご家族の悲しみやつらさが書かれていて、心に

響きました。愛する大切な人の死に向かい、愛していればいるほど残されるであろう、または残された方たちの悲しみは慟哭に近く、私たちケアを提供する側もまた大きな悲しみを抱えることになりました。

本書の中では、そういう方々の後悔や懺悔などの感情をそのまま表現されており、深い悲しみを感じることができました。私たちは、このような深い悲しみを感じてこそ残り少ない時間や、亡くされた後に提供するケアが、より心に沿う温かなケアとなりうるのではないのでしょうか。

このような方々をケアしなければいけないとき、どうしたらいいかと悩みながらもその方法を教えてくれる書物は少ないように思います。広瀬さんは、患者を看病していた時の思いの中で、せん妄の時や最後の時などの家族の想いに対して看護師がどうケアをしていけばいいかの方法を提示してくださっています。

また、数十年後にも残る「後悔の念」についても供述されるご家族の言葉が記されており、看護師の役割の大きさが思い知らされ、毎日のケアの中での姿勢を教えられます。

さらに悲嘆にある家族・遺族への対応

についても項目を設けて記述しており、わかりやすい内容となっています。「グリーフケアの理論と現状」の項では用語の定義や理論家たちの引用による悲嘆ケアへの考え方の示唆が、「遺族のためのサポートグループ」の中ではそのハウツーに当たる記載も具体的に提示されています。

終末期は、限られた命の時間であり、どれだけ患者家族にいい時間を持っていたいて死を迎えていたかが大切で、私たちが提供するケアにより予期悲嘆や悲嘆が違ってくると思っています。このような時間を、ともに過ごすことを体験できる看護師にとっては、自分自身を育てていくいい機会だと考えますが、看護師自身も悲嘆を感じ、セルフエフィカシー(自己効力感)が低下することも多いと感じています。広瀬さんは、その点にも着眼され、第3部で、看護師自身のためのグリーフケアについて紙数を割かれて語られています。

深く大きく、大切なケアなのに、なかなか現実に使にくい本が多かった中で、わかりやすく使いやすい内容になっていると思います。看護・介護を提供する私たちが、心を健全にして働くためにもお勧めしたい1冊です。